

猫における中日の諺と慣用句について¹

華南理工大学 金華 彭珊珊

要旨

猫と我々人間とは密接な関係をもっている。中日の人々にとって猫は昔から重要な存在である。猫における定義、歴史背景、人々の見方などには中日の異同点が多々見られる。歴史文献に見られる猫と関わる表現や諺と慣用句などにおける中日相違点を考察を通じて、中日両国の交流と生活の相違点などを試みる。

キーワード 猫 中日 諺 慣用句

1. 猫について

1.1 猫の定義

現代において、中日とも猫という漢字は同様で、両国ともに哺乳類の動物として知られている。その定義として表記、品詞分類と発音から中日の相違点を考察する。

表記について言えば、昔は、中日両国ともに猫を「狸」と表記していたことが判明した。戦国時代の思想家である韓非の『韓非子』に、「使鸡司夜，令狸执鼠，皆用其能。

（筆者訳：鶏に夜明けを告げさせ、狸（猫）にネズミを捕まえさせ、それぞれの役割をはたせる）」という句から猫を「狸」と表記していたことがわかった。その表記法として、宋代に入ってから詩などにも広く使われていたという。日本では、平安時代には猫を「ネコ」と表記していたが、その後は「狸」と表記し、使うようになったとされている。9世紀の作品『日本霊異記』に「狸」の字に「ネコ」と訓釈をつけていて使われていたことと、日本で最古と称する薬物辞典『本草和名』に「家狸、一名猫、和名称古末」という解釈も見られ、その「狸」は猫を指していたことが分かる。

品詞分類において哺乳類の動物であるということでは同様である。しかし、中国東北の官話では猫は閉じ込めることを指す動詞で扱われ、「猫冬」としている。「猫冬」とは冬の寒期に家に閉じ込めることを指す。これと異なり、日本では単に名詞として扱われている。大辞泉には、猫は食肉目ネコ科の哺乳類、三味線のこと、芸妓のことを意味していると記されている。猫が芸者や三味線の俗称としても使われていることが判明した。

¹ 作者プロフィール：金華，華南理工大学外国語学院，教授、文学博士，認知言語学、日本語教育、翻訳学；彭珊珊，華南理工大学外国語学院，日本語翻訳修士二年在学。

猫の発音においては違いが見られる。中国では、猫という漢字の音声は陰平（第一声）以外に、陽平（第二声）もあって、陽平の場合は「折る」ということを指し、腰が曲がっていることを「猫腰」といって使われている。一方、日本では音声による使い方の区別は見られない。

1.2 猫とその歴史背景

古代中国では、猫はネズミを捕る、作物を守ってくれるものとして、人々に尊敬されてきた動物であった。一早く猫を文献に記載したのが『礼記』の特性篇である。そこには

「迎猫，为其食田鼠也；迎虎，为其食田豕也，迎而祭之也（筆者訳：猫を迎えるのは、田ネズミを食わせるためである。虎を迎えるのは、田豚を食わせるためである。迎えて、それらを祭る）」という一句がある。その時代の人々が毎年十二月に豊作を祈る万物の神を祭る際、猫を神として祭られていたことと考えられる。隋唐に入り、ネズミ捕獲の為に猫は宮廷に入らせ、人々から特別待遇を貰い、唐の大盛時には大量に猫を飼い始めたという記載もあった。それを証明する『酉陽雜俎の続編』巻八（段成式）には「猫の目は朝から晩まで丸く、昼になると線のように収まる。鼻端が常に冷たく、夏至の日のみ暖かい。猫は陰の属性を持つから、そのようになるのも自然なことである」と詳しく猫について描いている。宋の時代にも清明時代にも、宮廷と市井によって多く飼育されるようになったという。特に明代の洪熙帝は猫好きで、大臣らに猫の絵を描かせたり、猫に関する詩などを書かせたりするなど、猫に爵位や階位までも授けたという。

ネズミ捕獲用以外に、猫は食用として飼われる時期もあった。『本草綱目』に猫肉は、結核、瘰癧と蠱毒、蠱毒と心腹の痛みなどを治すことができるときさいされている。今にも蛇は竜、猫は虎、鶏は鳳凰に見立てた龍虎鳳という料理があると噂があるように猫を食用としていたことは間違いない。

日本でも中国同様ネズミを駆除する動物として、古代から農家に愛され、飼育されていたとされている。しかし、初めは日本に土着できなかったという。『古事記』や『日本書紀』などに猫に関する記載は見られなかったことから判断できる。しかし、9世紀の仏教説話集『日本霊異記』に初めて「狸」という字が使われるようになった。その説話集に「我れ正月の一日に狸に成りて、汝が家に入りし時に、供養の飯と糞と種の味き物とに飽く。」と亡き父が息子との再会のために、猫に変身したという物語が描かれている。その後から猫に関する記載が多く見られるようになった。奈良時代に入り、経文を守る役目として猫を大陸から輸入したという。また、平安時代にはペットとして飼育するようになり、『源氏物語』にも猫が登場するようになる。田中氏（2014）によると、猫は『源氏物語』の中で朱雀院の娘・女三宮の高貴な身分を象徴するもので描かれていたという。しか

し、鎌倉時代には怪異を起こす化物として扱われるようになる。『本朝世紀』に化物「山猫」近江と美濃地区の山中に現れたとする「猫は魔性」と人々に恐怖をもたらすものとして伝わるようになる。江戸時代に入り、再びネズミ捕獲と愛玩動物として扱うようになったと、特にその大半は愛玩で飼われるようになったという。また、明治時代には猫の皮で三味線を作ったことから、芸者と三味線は猫を指す隠語として使われるようになり、それが歌川国芳の『猫のけいこ』の絵でわかる。それに、夏目漱石の『吾輩は猫である』の冒頭に「この書生というのは時々我々を捕つかまえて煮にて食う」と書かれていることから、日本でも食用としていたことが分かる。

総じて言えば、中日両国の人々と猫という動物とは深い関係を持っていることで、このような親密な関係は、人々の生活が反映された猫における諺や慣用句を多々生んだと考えられる。

2. 猫における中日諺と慣用句

中日の諺、慣用句に猫という文字が含まれ、また動物と扱われた特徴を基に、中国の『歇後語詞典』から 52 例と日本の『日本慣用句詞典』から 70 例の猫における諺と慣用句を抜き出し、分析してみた。諺と慣用句の特徴によってそれぞれ猫とネズミとの関係、食べ物との関係、猫の身体部位、猫のイメージと魔性及びその他と六種類に分類して考察を行う。表にまとめると次のとおりである。

表 1 中日猫における諺と慣用句分類

分類 国別	ネズミとの関係	食べ物との関係	猫の身体部位	猫におけるイメージ	猫の魔性	その他	合計
中国	22 例	13 例	4 例	5 例	なし	8 例	52 例
日本	14 例	12 例	12 例	16 例	5 例	11 例	70 例

表 1 から分かるように中国では、猫とネズミとの関係からなるのが 22 例、日本では猫におけるイメージと関わったのが 16 例とそれぞれの国で一番多い。

中国ではネズミとの関係と、食べ物との関係からなった表現が圧倒的に多く、ねずみ捕獲の道具として、また人間の食用として多く利用されてきたと思われる。それとは異なり、日本では猫の魔性として思われたと、言い換えれば精神面での影響が大きかったと判断できよう。ここでは、主に猫とネズミ、猫と食べ物との関係、猫の身体部位からなった猫における中日諺と慣用句の異同点を試みる。

2.1 猫とネズミ

ネズミとの関係からなった中国語の諺と慣用句は 22 例もあり、全体の 42 パーセントを占める。それと比べ、日本語は 14 例、全体の 20 パーセントを占め、両国ともに人々の生活と深い関係があったと思われる。これは上述の歴史背景からも分かっているように、中日両国共にネズミの駆除目的で猫を飼っていたわけで、そこから生じたと考えられる。また、それに関する用語の多くは猫がネズミの天敵であるという隠喩語として使われていることが明らかになった。例えば、苦手な相手や圧倒されるような人物の前で、萎縮してしまうひとを指すときに、中国語では「老鼠遇了猫儿」、「老鼠听了猫儿叫」と、日本語では「猫に会ったネズミ」、「猫に追われたネズミ」、「猫の前のネズミ」などと表現する。ここでは、猫は怖いもの、ネズミにとって猫は威嚇のもの等、人々の生活では恐れる象徴の隠語として使われていると考えられる。

しかし、中国語には、日本語にない「黒猫白猫、抓住老鼠就是好猫（筆者訳：黒猫であれ白猫であれ、鼠をとるものであれば良い猫である）」という表現がある。これは鄧小平氏が唱えた「白猫黒猫論」から来たものである。その意味としては、どんな方法であれ、良い成果をあげたら、それでいいということを指す表現である。このような有名人の名言からきたものには国によって、民族によって異なってしまうことは当然のことで、それが中日両国の文化や人々の考えの違いの表れであろう。

2.2 猫と食べ物

猫と食べ物との関係によるものとして、中国語には 13 例、日本語には 12 例が見られた。唐代では、猫が主に貴族らに飼われこともあって、人々は猫は一日中食べてからは長時間寝るもの、怠惰なものとして見なされてきたと考えられる。それが、「馋猫」という言葉であろう。「馋猫」というのは、中国では怠け者で食べることに特に執着している人や食べることならメンツも考えない人を指す時によく使われる表現である。これと似たような表現として、日本では「鰹節を猫に預ける」、「魚を猫に預ける」、「猫に鰹節」、「猫に鰹節の番」、「猫に魚の番」、「猫と庄屋にとらぬはない」と、猫と食べ物に関する表現がかなり多く、特に鰹節との関わった表現が多々見られる。それは、平安時代から王朝貴族に愛され、高級な鰹節を餌にしたことと、食いしん坊であったことが読み取れる。

また、中国語では「猫不吃咸鱼」と日本語では「猫の魚辞退」という全く同じ意味で使われる表現があるように、猫の好物を目にしてもそれを拒否してしまう非常識的な行動から生まれた表現である。しかし、実は口先では断るうわべだけの遠慮の隠喩表現で、中日両国の類似した猫に避ける諺表現である。

2.3 猫の身体部位

猫の身体特徴に注目した諺と慣用句として、中国語には4例、日本語には12例が見られる。日本語の表現が圧倒的に多いことが明らかで、それは日本人の繊細な観察力と猫との密接な暮らしとは切り離すことができないと考えられる。そこで、猫の目、額、鼻、歯における諺と慣用句を試みる。猫の目における表現は、中日両国共に同じ意味で使われている。中国語では「猫儿的眼」と、日本語では「女の心は猫の目」、「猫の目のよう」という物事の随時変化を指すこととして使われる。このような表現は、猫の目が白日と夜中には光によって、全く違った変化をしていることから来た表現で、よく変わる人を指す隠喩として使われている。

上述した中日両国とも同じ意味で使われる表現もあれば、日本語にしかない諺と慣用句が多く見られる。日本語には「猫の額」と場所や土地面積の非常に狭いことを指す表現、「女の腰と猫の鼻はいつも冷たい」と女の腰はいつも冷たいことを指す表現、「女の尻と猫の鼻は土用三日暖かい」と土用三日だけ女の尻が暖かいを指す表現、「猫の歯に蚤」と猫が蚤を取ろうとするが、なかなか捕まえないということからきた不確実なことやめったに成功しないことを指す表現など、猫の身体部位を使った隠喩表現が多い。

上述したように、猫の身体部位の特徴からなる表現は、猫の習性から生まれてもので、日本語には多く見られたが、中国語にはほとんど見られないということはなんでだろうと私たちに疑問をもたらしている。

3. 結論

猫という動物は地球上どこにも見られるものである。それがねずみの捕獲であり、ペットとしてあり、人間の生活と密接な関係を持っていることには間違いない。人間と密接な関係を持っているから人々の生活を反映する、または人々の考えなどを喩する諺や慣用句が多く生まれてきたことであろう。中日両国ともに人々は猫と共存する現代社会において、猫は生まれからネズミを捕獲するものであるという考え方が次第に変わり、人々の愛玩動物として飼われるようになっていくことは事実である。従って、中日両国ともに昔から現在に至るまで、猫に関わった生活用語、諺、慣用句をよく使われてきたこと、それには相似点もあり、歴史的繋がりが読み取れたかと思うと、相違点もあって両国の文化や生活面などでの違さも無視できないと思われる。換言すれば、中日両国の人々の生活環境や考え方の違いによって、その言葉遣いには類似点のみではなく、異なる点も多く、両国の一衣帯水の隣国という深い繋がりとまたそれぞれの違ったことにも注目すべきだと思われる。

引用文献リスト

- [1] 张秀华. 日本文化中的猫情结及其文化折射[J]. 解放军外国语学院学报, 2004(04): 98-101.
- [2] 白洋. 日本猫文化[D]. 辽宁大学, 2013.
- [3] 李湘涛. 中国的猫文化[J]. 科技智囊, 2015(10): 79-83.
- [4] 王连娣. 日语谚语中的“猫谚”[J]. 郑州航空工业管理学院学报(社会科学版), 2015, 34(04): 99-102.
- [5] 王连娣. 试论日本谚语中“猫文化”的内涵及嬗变[J]. 黑河学院学报, 2019, 10(07): 204-206.
- [6] 论中日文化中对“猫”的认知异同[J]. 刘红艳. 淮海工学院学报(人文社会科学版). 2013(12).
- [7] 李志芳, 柳慕云. 日本民间故事中“猫”的形象[J]. 外国问题研究, 2009, (3): 33-36.
- [8] 闫静. 中日猫妖文化比较探析[J]. 青年文学家, 2018, (17): 144.
- [9] 何剑仪. 瓷猫枕浅探——以西汉南越王博物馆藏瓷猫枕为例[J]. 文物天地, 2019(09): 55-58.
- [10] 夏秋. 历史考据: 猫与人结缘久矣[J]. 意林文汇. 2016(24)
- [11] 彭晓燕. 中西方“猫狗”词汇的不同文化内涵[J]. 内蒙古财经大学报, 2020, 18(04): 68-70.
- [12] 苏北坡. 粤人吃猫暗访记[J]. 记者观察(上半月), 2007(05): 54-57.
- [13] 徐珂. 清稗类钞. 93, 清, 传世藏书整理本.
- [14] 田建华. 本草纲目彩色图集[M]. 河北科学技术出版社. p357
- [16] 黄汉. 猫苑[M]. 上海进步书局
- [17] 後藤秋正. 「猫と漢詩」札記 - 古代から唐代まで[J]. 北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編, 2007, 57(2): 1-14
- [18] 田中貴子. 猫の古典文学誌[M]. 講談社学術文庫
- [19] 維基中國哲學書電子化計劃
<https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=350982&searchu=猫> (201), [参照 2021-01-06]